

## ＜日本イギリス哲学会 第107回部会関東例会 報告要旨＞

### 第一報告：ニュートン主義者ジョージ・ターンブルにおける道徳的自由 —観念連合と習慣の法則との関係性から—

副島 基輝

本発表は、ニュートン主義者ジョージ・ターンブル(1698-1748)を取り上げ、彼の主著『道徳哲学原理』(1740)において人間の道徳的自由がどのように議論されているかについて、彼の観念連合論及び習慣論との関係の中で考察するものである。既存の研究において、スコットランド啓蒙とニュートン、及びニュートン主義の関係は指摘されてきた。しかし、ジョージ・ターンブルはその主著『道徳哲学原理』においてニュートン主義道徳哲学の構築を試みた最初の人物であったのにも関わらず、その道徳哲学の内実については十分に研究されていない。そこで本発表は、ニュートン主義道徳哲学者の代表的人物としてジョージ・ターンブルを取り上げ、彼の『道徳哲学原理』(1740)における記述を手掛かりとして、ニュートン主義道徳哲学において人間の道徳的自由がどのように議論されているのかについて考察する。

第一に、『道徳哲学原理』(1740)の序論及びその著作の原型であったとされる初期著作『自然哲学と道徳哲学の接続について』(1723)における記述を手掛かりとして、彼の道徳哲学において、どのように自然哲学の方法が適用されていたのかについて整理する。第二に、『道徳哲学原理』(1740)の第三章における観念連合と習慣の法則についての議論を取り上げ、道徳的自由が観念連合及び習慣の法則がもたらす最も有用で善良な効果として位置付けられていたことについて確認する。第三に、ターンブルが道徳的自由を論じる際、自由と必然をめぐる形而上学的議論は一貫して避けられおり、彼の論じる道徳的自由はその対概念として隷属が想定されている点を指摘する。最後に、ターンブルの道徳的自由についての議論において、その実践的方向として熟慮の習慣の確立する教育が見据えられていたことを指摘し、彼の教育論である『自由教育についての所見』(1742)との関係性を検討する。

(国際基督教大学・院)

## 第二報告：. 論究としての『リヴァイアサン』

### —『リヴァイアサン』の目的に関する一考察—

郷家 綾

ホブズはいかなる目的をもって『リヴァイアサン』を執筆したのだろうか。我々が『リヴァイアサン』の執筆目的を知る手がかりとなりうるのは、1662年にやり取りされたチャールズ2世との書簡と、1672年に記されたラテン語による自伝詩であろう。しかし、前者においては、「この本は、キリストの王国を口実にして、想像しうる最も恐ろしい行為が行われていた時代に書かれたものであり、そのことへの正当な憤り (just indignation) から、当時、多くの聖職者が反逆の口実として説いていたキリストの王国の教義の真相を知りたいと思った」と述べられている一方で、後者においては、「私はこんなにも多くの、こんなにも醜い犯罪が、神の命令にとされるのに耐えられなかった」と記されているため、両者の執筆目的はわずかながらも明白に異なっている。

そこで本報告は、『リヴァイアサン』のテキストそのものを手がかりとして、『リヴァイアサン』の執筆目的を読み取ることがを試みる。その際に着目するのは、『リヴァイアサン』の献辞において、ホブズ自身が『リヴァイアサン』を「コモンウェルスについての論究 (my discourse of Common-wealth)」だとみなしていることである。

ホブズによれば、論究とは「思考の系列または連続」を意味する語であり、論究には「心の論究 (*Mentall Discourse*)」と「語による論究 (*Discourse in words*)」が存在する。そして『リヴァイアサン』第3章において、「ある意欲及び企図によって (by some desire, and designe)」「規制された (regulated)」思考は、「ある意欲または何らかの情念の終わりや目標 (the end and scope of some desire, or other passion)」のような、「情念に満ちた思考 (*Passionate Thought*)」によって支配し方向づけられていると読み取れる。本報告は、この思考についての規定を、論究としての『リヴァイアサン』に当てはめることによって、『リヴァイアサン』の解釈を試みる。

(慶應義塾大学・院)